

山口県埋蔵文化財調査報告第110集

昭和62年度県営圃場整備
事業に伴う発掘調査報告

国秀遺跡

1988

財団法人山口県教育財団
山口県教育委員会

序

近年、農業基盤整備事業の進展に伴い、県下各地の埋蔵文化財が掘り起こされ消失して行く頻度も多くなってまいりました。

私達の県土山口を築いてきた先人達のその永い営みを今に伝える数多くの歴史的遺産を、こうした開発との調整を図りつつ記録にとどめて後世に残すため財団法人山口県教育財団では、教育・文化の振興という立場から、本年度も山口県農林部の委託を受け、圃場整備地区に係わります埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

ここに報告いたしました美祢郡秋芳町所在の国秀遺跡の調査では、弥生時代と室町時代の集落跡が発掘され、石鏃や土器などの遺物が発見されました。

これらの資料は、当時の人々の生活や文化を知る上で、貴重な手がかりを与えてくれました。

発掘調査の成果をまとめた本書が、学術・教育の資料として利用されることはもとより、ふるさとづくりの基礎資料として広く活用されることを期待するものであります。

調査に当たりまして、御指導・御協力をいただきました関係各位に対し、深甚なる謝意を表するものであります。

昭和63年2月

財団法人山口県教育財団

理事長 高山 治

序

本県では、恵まれた自然環境のなかで豊かな地域社会の実現に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策を推進しています。

こうした開発工事からかけがえのない埋蔵文化財を保護し、併せて、開発と文化財保護との調和のとれた県土づくりを目指して、山口県教育委員会では関係機関と協議を行い、遺跡の保存や発掘調査を実施しているところです。

昭和62年度は、美祿郡秋芳町嘉万に所在する国秀遺跡の発掘調査を実施し、弥生時代及び室町時代の集落跡を発見するとともに、当時の人々の生活や文化を知るうえで数多くの貴重な資料を得ることができました。

本書は、その調査成果をまとめた記録であり、文化財愛護への理解を深め、教育並びに学術研究の資料として広く活用されることを願うものであります。

おわりに、発掘調査の実施に当たり御協力いただいた関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

昭和63年2月

山口県教育委員会

教育長 高山 治

例 言

- 1 本書は、県営圃場整備事業に先立って昭和62年度に実施した山口県美祢郡秋芳町大字嘉万に所在する国秀遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、財団法人山口県教育財団が山口県農林部の委託を受けて実施した調査と、文化庁国庫補助を得て山口県教育委員会が実施した調査の成果を合わせて報告するものである。
- 3 調査組織は、次のとおりである。

調査主体 財団法人山口県教育財団（理事長 高山 治）

山口県教育委員会（教育長 高山 治）

事務局 財団法人山口県教育財団（事務局長 田中義人）

山口県教育委員会文化課（課長 工藤公照）

調査担当 〔総括〕山口県埋蔵文化財センター（所長 工藤公照）

（次長 中村徹也）

（係長 松岡睦彦）

（主任 前田耕次）

〔調査員〕財団法人山口県教育財団事務局指導主事 藤井勝彦

◇ 大村秀典

◇ 阿字雄徹

調査補助員 木村明史

山口県埋蔵文化財センター文化財専門員 西岡義貴

〔援助〕山口県埋蔵文化財センター職員

- 4 発掘調査の実施に当たり、山口県農林部耕地課・山口県山口土地改良事務所・秋芳町役場・秋芳町教育委員会・秋芳町土地改良区の協力を受け、また、発掘調査作業員として参加していただいた地元の方々に大変お世話になった。
- 5 本遺跡出土石器の石材鑑定は、山口県立山口博物館専門学芸員 橋本恭一氏にお願いした。なお、鑑定は表面観察によるものである。
- 6 本書に掲載した地図（第1図）は、建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図「秋吉台」を複製使用したものである。
- 7 本書に使用した方位は国土座標で、レベルは海拔標高で示した。
- 8 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。
DW－竪穴住居 B－掘立柱建物 PH－柱穴
- 9 本書に収録した実測図・写真の作成および本文の執筆は、中村の指導・助言を得て藤井・木村・西岡が分担し、西岡が編集した。

昭和62年度県営園地整備
事業に伴う発掘調査報告

国秀遺跡

目次

遺跡の位置と環境

調査のあらまし

調査の成果

ま と め

挿図目次

| | | |
|------|---------------------|--------|
| 第1図 | 遺跡の遠景（西から）…………… | 1 |
| 第2図 | 遺跡周辺の航空写真…………… | 2 |
| 第3図 | 遺跡の位置と周辺の遺跡…………… | 2 |
| 第4図 | 遺構の検出…………… | 3 |
| 第5図 | 遺構の掘り込み…………… | 3 |
| 第6図 | 調査地区の全景…………… | 4 |
| 第7図 | 調査地区と周辺の地形…………… | 4 |
| 第8図 | 遺構配置図…………… | (折り込み) |
| 第9図 | 竪穴住居跡（DW-1）実測図…………… | 5 |
| 第10図 | 掘立柱建物跡（B-4）実測図…………… | 6 |
| 第11図 | 出土遺物実測図…………… | 7 |

表・目次

| | | |
|-----|----------------|---|
| 第1表 | 掘立柱建物跡一覧表…………… | 6 |
|-----|----------------|---|

図版目次

| | |
|-----|--|
| 図版Ⅰ | (上) 遺跡の遠景（西から） (下) 調査地区の近景（南西から） |
| 図版Ⅱ | (上) 調査地区の全景（南東から） (下) 調査地区の全景 |
| 図版Ⅲ | (上) 調査地区の完掘状況（北西から） (下) 調査地区の完掘状況（南東から） |
| 図版Ⅳ | (上) 竪穴住居跡（DW-1） (下) 竪穴住居跡（DW-1） |
| 図版Ⅴ | (上) 出土遺物（旧石器・石鏃） (下) 出土遺物（弥生土器・叩石・擂鉢） |

遺跡の位置と環境

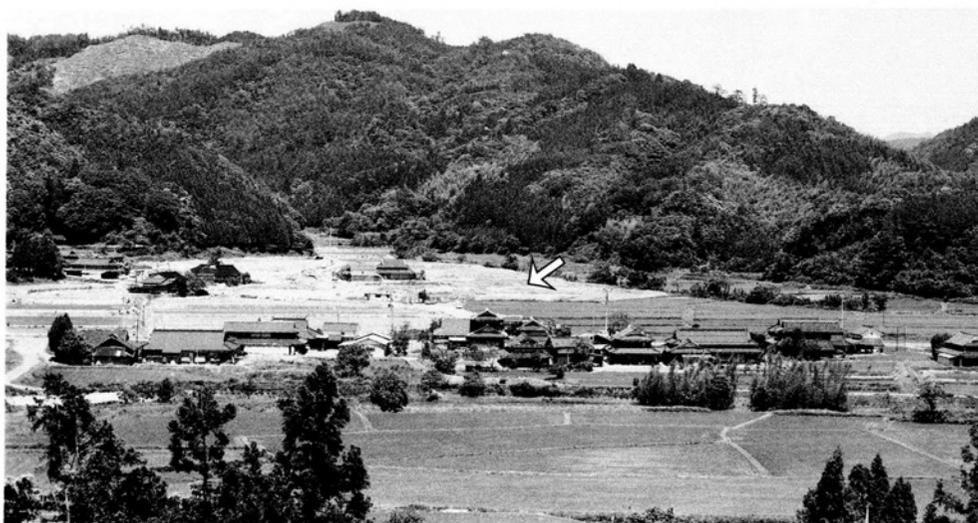
国秀遺跡は、美祢郡秋芳町大字嘉万字正田1529番地に所在する。

秋芳町は、山口県の北西部に位置する。周辺一帯はわが国でも有数のカルスト台地（秋吉台）で占められ、その南麓に開口する秋芳洞は県の代表的観光地として国定公園に指定されている。当地は近世、赤間関街道の宿場で、歴史的にも内陸交通の要地であった。

地形のうえでは、中国山地の西先端部の分水嶺域にある。断層作用により地塊・地壘山地が形成され、主脈をなす長門山地は起伏量400m以上の所謂中起伏山地となっている。厚東川は、長門山地の高峰桂木山（標高702m）を水源とする。その支流による浸食・堆積で沖積低地がつくられ、洪積台地とともに嘉万盆地となった。盆地は秋吉台の西麓に広がり、東西約1.5km・南北約4kmの空間をもつ。カルスト地域にみられる典型的な溶食盆地（ポリエ）である。

国秀遺跡は、盆地の北端にある。遺跡の南東側に沿う日峰川は、如意岳の山脚部を縦断して厚東川に合流する。後世の水田化などの開墾による大規模な土地削平が、遺跡を包蔵する近傍の洪積台地や沖積地の旧地形を失わせている。一方、この両河川の氾濫を幾度となく受けて開析された小規模な扇状台地上（標高112m）に営まれた集落跡こそ本遺跡の実態であり、そこには弥生時代後葉から室町時代に至って生きた人々の足跡が残されている。当時の生活の基本となる稲作に最適の低湿地を望む微高地、そして肥沃な土壌と豊富な水系など、斯様にめぐまれた生産基盤と居住環境はこの集落をますます発展させたものと推定され、永く人々の生活の主舞台として引き継がれていったのであろう。

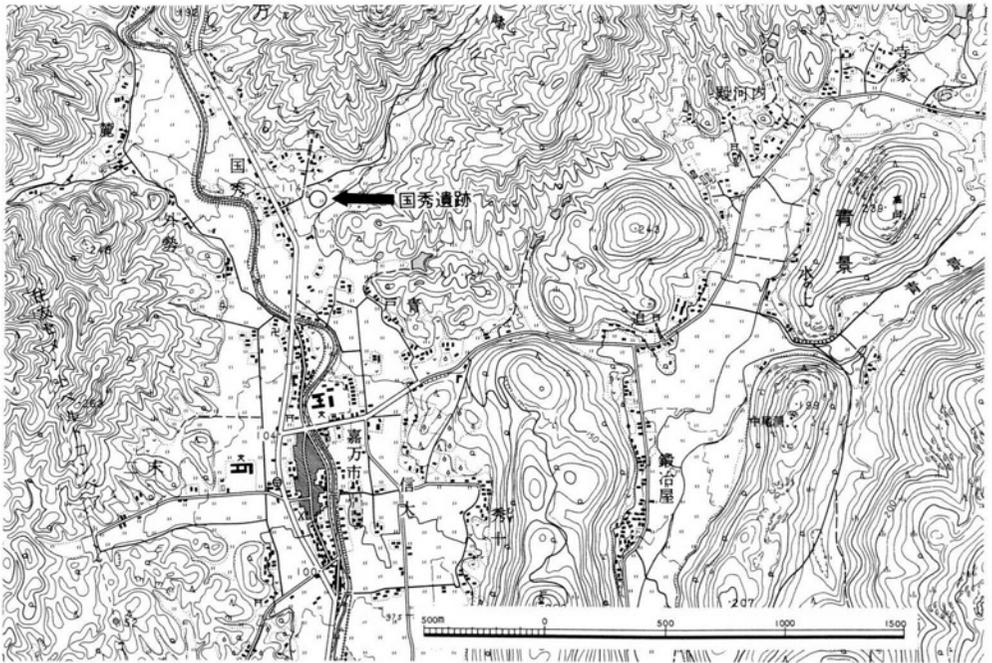
なお、本遺跡の周辺に分布する弥生時代の遺跡として秀十遺跡・戸青遺跡・宮地遺跡などが知られるが、発掘調査を経たものではなく詳細は不明となっている。



△第1図 遺跡の遠景（西から）



△第2図 遺跡周辺の航空写真



△第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡

調査のあらまし

山口県では農業基盤の整備をめざし、各地で圃場整備事業を推進している。秋芳町の北部地域における圃場整備事業は全面積474haの田圃を対象に昭和58年度から実施され、昭和61年度末までに約32%を終えている。昭和62年度は嘉万東地区128haのうち25haが予定され、工事が進行している。

山口県教育委員会では文化財保護の立場から、圃場整備事業の実施に先立ち工事予定地内の埋蔵文化財の予察調査を実施した。その結果、宇正田の水田から弥生土器などを伴う住居跡を発見した。そこで県農林部耕地課と協議したところ土地掘削は工程上避けられないことがわかったので、工事に先立ち発掘調査を行って記録保存をするはこびとなった。

調査は県耕地課の委託を受けた財団法人山口県教育財団と文化庁の国庫補助を受けた県教育委員会が共同で担当し、昭和62年5月1日から同年6月29日まで実施した。

まず、遺跡の広がりや密度を詳細に把握し、有効な調査区を設定するため対象地区全域にわたりテストピットを設けた。本調査では、この試掘調査の結果をもとに遺構の分布密度の高い水田について全面発掘を実施することにした。面積は約1,500㎡。発掘は重機による耕土下盤土までの排土作業から開始。調査区の北西部に密集して柱穴を検出し、西部中央では円形竪穴住居跡を1軒検出した。南東部は日峰川に近く、たび重なる氾濫で往古の遺構が押し流された可能性が土層断面より確認できた。

次に、遺構の掘り込みに入り、遺構の重複部分については切り合い関係を注意深く観察した。竪穴住居跡からは弥生土器が出土して、弥生時代後期～終末期のものであることがわかった。また、多数の柱穴からは弥生土器や瓦質土器が出土した。これらの柱穴群から確実に建物を組むことができたのは5棟で、出土遺物から室町時代後期の掘立柱建物跡であることがわかり、さらに棟方向から2時期にわたって営まれていたことが判明した。

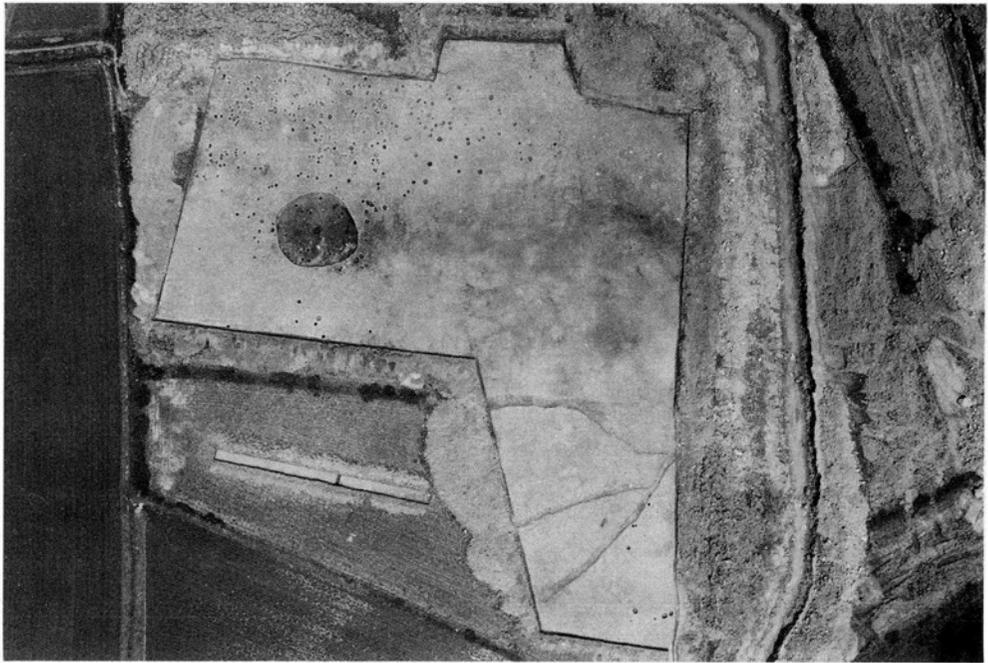
遺構の全容が明らかになると、遺構の規模や構造を記録するために実測・写真撮影を行った。併せて、平板による遺構分布図や遺跡周辺の地形実測図を作成し、最後に空中写真による遺跡の完掘全景を撮影して現地での作業を終えた。



△第4図 遺構の検出



△第5図 遺構の掘り込み



△第6図 調査地区の全景



△第7図 調査地区と周辺の地形

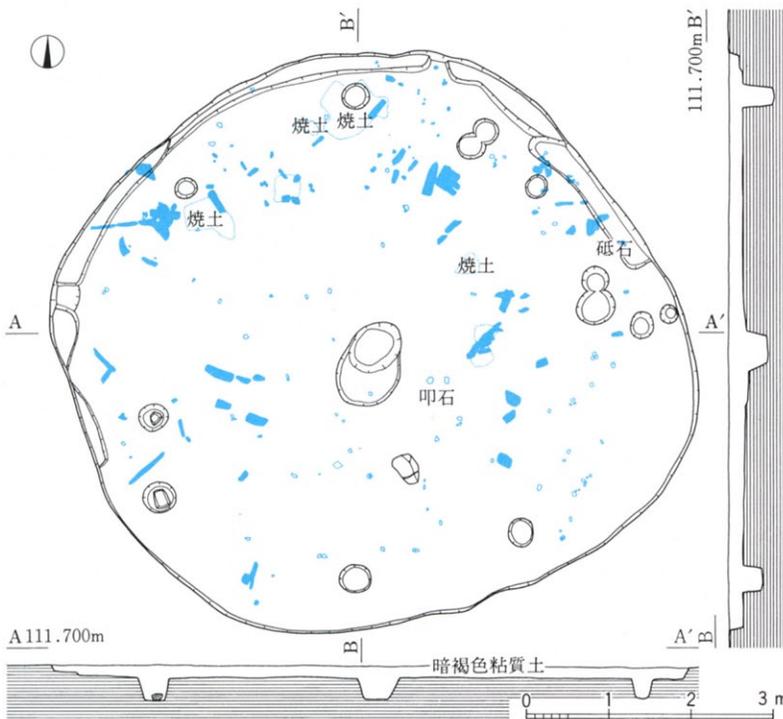


△第8図 遺構配置図

調査の成果

本遺跡は弥生時代後期後半～終末期、および室町時代後期に営まれた集落遺跡である。今回の調査で検出された遺構は円形竪穴住居跡1軒（弥生時代）・掘立柱建物跡5棟（室町時代）と柱穴多数があり、また、調査区中央で北東—南西に走る古い河川跡（日峰川旧河道）が確認された。とくにこの旧河川は竪穴住居の南半分に土石を伴って侵入していることから、弥生時代終末期頃に鉄砲水となって形成されたものと考えられる。一方、掘立柱建物跡はすべて室町時代後期に属し、調査区の北～北西部に集中して分布する。

竪穴住居跡（DW-1） 調査区の中央西寄りに位置する。上部を削平されているものの壁高14cmを残し、遺存状態は比較的良好である。平面プランは円形。住居（壁）の南半は旧河川により消失しているが、床面はほぼ旧状をとどめる。直径は南北6.86m×東西7.89m、床面積約44.5㎡の規模をもつ大型の住居といえ、主柱は壁に沿って7～8本が不均等な間隔で配置される。床面の標高は111.04m。中央の炉は長径69cm×短径56cmの長円形で、深さは最深部で26cmをはかり、炭を多量に含む。貼床および周溝は確認されなかった。また、床面には平台状の自然石が遺存し、住居内での空間利用（作業）の在り方を考察する上で興味深い資料である。床面から後期後半～終末期に比定される弥生土器（甕・壺・高坏）片および叩石・砥石^{たたきいし}・^{といし}などが出土した。なお、床全面に散乱した状態で検出された炭化木は、この住居が火災により焼け落ちた事実を伝えるものとして注目されよう。



△第9図 竪穴住居跡（DW-1）実測図

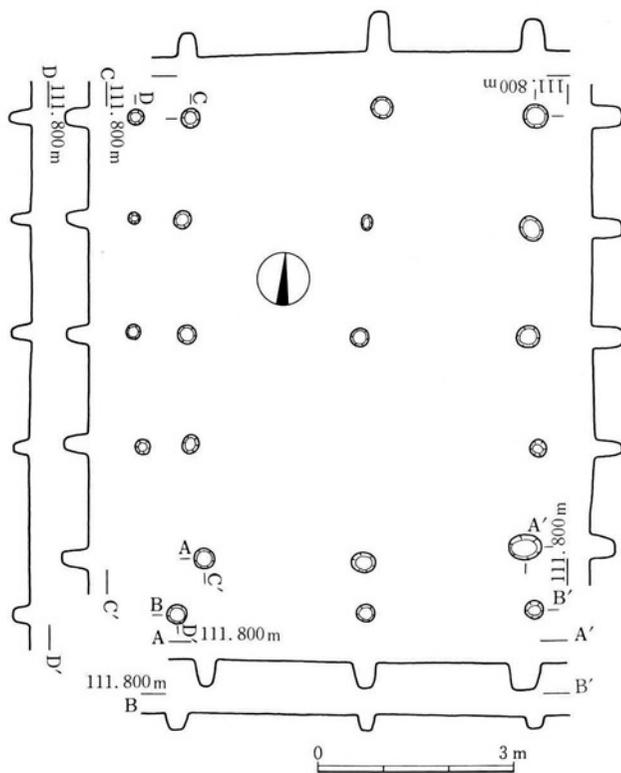
掘立柱建物跡 調査区全体から小ピットが約 470個検出された。これらは調査区北西に密集しており、一つの集落を形成していたと考えられる。多数の小ピットのなかから5棟の掘立柱建物跡を確認した。これらが存在した時期は、柱穴の埋土や出土遺物などを手がかりとして室町時代後期に比定できる。棟方向や配置からみて、B-1・2・3とB-4・5は時期を異にすると推定できる。

B-4には、西側と南側に3尺の幅をもって柱穴が並ぶ。一見庇とも捉えられるが、南端柱穴が建物の南西隅柱と対応していない。また、「室町時代の近畿地方の地侍・名主層の住居でさえ庇を附加していないらしい」（『中世住居史』）ことを考えあわせると、目隠し扉であった可能性が高い。

しかし、陽の当たる南側と西側に建物からわずか3尺ほど離れた近接する位置に扉を構築するか否かという点、すなわち、扉の本来の機能と採光などの相互関係を総合的に判断した場合、これを扉と捉えることに若干の疑問の余地が残されよう。

B-4は、柱穴から出土した瓦質土器・播鉢片より室町時代後期に属する建物と考える。

B-5はB-4と棟方向を同じくし、3.4坪と規模が小さいのでB-4の付属棟の可能性が考えられるが、しかし、双方の間隔が1.5尺しかないため同時に併存したとは考え難い。



△第10図 掘立柱建物跡（B-4）実測図

| 建物 番号 | 規模 (間) | 棟方向 ⊙ | 柱 間 (m) | | 面 積 m ² (坪) | 備 考 |
|----------|-----------|----------|-----------------|---------|---------------------------|--------------------------------|
| | | | 桁 行 | 梁 行 | | |
| B-1 | 2×2 | ／ | 2.7+2.7 | 1.7+1.5 | 17.3 (5.2) | |
| B-2 | 3×2 | ＼ | 2.1+2.1+2.4 | 2.2+2.2 | 29.0 (8.8) | |
| B-3 | 2×2 | ＼ | 2.2+2.1 | 1.6+1.5 | 13.3 (4.0) | |
| B-4 | 4×2 | | 1.6+1.7+1.7+1.7 | 2.5+2.5 | 33.5(10.1) | 塀施設を伴う。柱穴より室町時代後期の瓦質土器や播鉢片が出土。 |
| B-5 | 2×2 | — | 2.1+1.8 | 1.4+1.5 | 11.3 (3.4) | |

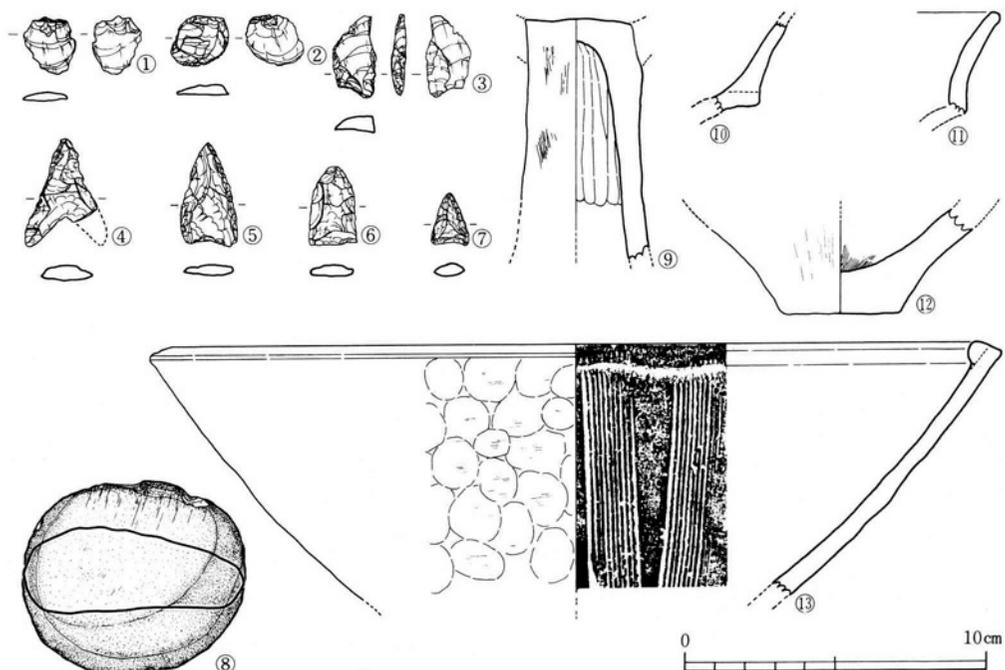
△第1表 掘立柱建物跡一覧表

各遺構からの出土遺物として弥生土器（甕・壺・高坏）・土師器（坏）・播鉢・叩石・石鏃・砥石などがあり、このほか旧石器3点が包含層から採取されている。

弥生土器（第11図 ⑨・⑩・⑪・⑫） ⑨は高坏形土器の脚柱部片。調整は外面縦方向のやや雑な研磨、内面は指ナデ。粗砂粒を少し含む。⑩は壺形土器の口縁部片。調整は内外面とも横ナデ。焼成は良好で、細砂粒を含む。⑪は甕形土器の口縁部片。調整は内外面とも横ナデ。胎土には細砂を含むが、焼成は良好といえる。⑨～⑪は竪穴住居跡（DW-1）床面からの出土で、弥生時代後期後半～終末期のものとみられる。

石器（第11図 ①・②・③・④・⑤・⑥・⑦・⑧） ①は剥片。縦長で、打面方向の頭部に加工痕。黒曜石製。重さ0.30g。②は円形搔器。一次調整が縦長剥片の外面に加えられ、さらに同面から周縁に刃潰して形が整えられている。黒曜石製。重さ7.40g。③はナイフ。基部整形背つき尖頭器で、切り出しを呈する九州型。縦長剥片を素材とする。二側辺加工、背部は切り取りによって鋸歯状に整形される。黒曜石製。重さ1.15g。④～⑦は打製石鏃で、すべて包含層出土。いずれも無茎で、基部形は④・⑤が凹基式、⑥・⑦は平基式である。石材は④流紋岩・⑤安山岩・⑥⑦黑色片岩、重さは④1.65g・⑤1.80g・⑥1.00g・⑦0.10g。⑧は叩石。竪穴住居跡床面より出土。周縁の $\frac{1}{4}$ にわたって敲打に使用した痕跡が認められる。石材は閃緑岩で、重さ116.70g。

播鉢（第11図 ⑬） 口径は復元推定値で約28.2cm。底部を欠失し、器高は不明。内面は1束10条の櫛搔き上げ。細砂を多く含む胎土で、焼成はやや軟弱。黒灰色を呈する。室町時代後期の所産と考えられる。



△第11図 出土遺物実測図

ま と め

今回の発掘調査の成果を整理し、私見を加えながら国秀遺跡の推移をたどってみたい。

本遺跡で発見された最古の遺物は、旧石器時代のナイフ形石器である。石材は姫烏産の黒曜石で、東部九州一带に普遍的な九州型の特徴を示している。遺構からの伴出遺物ではないが周辺に同時代の遺跡の所在を裏付けるもので、また、直接間接を問わず搬入品として両地の交易を考察するうえで注目すべき資料であるといえよう。

農耕技術を携えた集団が嘉万盆地北域の如意岳南西山麓で生活を開始するのは弥生時代も終盤に至ってからである。盆地南端部を占める集落（中村遺跡）から分派し北上したとみられるこの集団は、日峰川の開析した小規模な扇状台地に集落を営んだ。台地西縁は厚東川（旧河道）による河岸段丘が形成され、段丘下の低位面（氾濫原）湿泥地を水田に拓いたのであろう。調査区内からの住居跡の検出は1軒のみで集落の全容を把握し得ないが、その広がりには自然地形から鑑みて両河川にはさまれた範囲であったと推定できる。

竪穴住居跡の平面プランは円形で、規模としては大型の部類に属する。炬を囲んで7～8本の主柱が壁に沿って配列される多柱構造の住居である。突抜遺跡（阿東町）や右田・一丁田遺跡（防府市）など同時期の遺跡に多見される住居の小型化や4本柱構造への変化が一般的な状況下であって、本遺跡のそれはやや保守的な様相をとどめている点が指摘されよう。しかし一方で、高畑遺跡（日置町）の1・2・4号住居や松尾遺跡（平生町）の3号住居などに代表される大型住居をみる限り、これを保守的と捉えるより寧ろ住居の基本構造の変化には個々の地域性がある程度作用した可能性も考慮しておく必要がある。

住居の詳細な時期比定については遺物が少なく小片であるため困難であるが、床面出土の土器（複合口縁）片の特徴から弥生時代後期後半～終末期として大過なからう。とくに甕形土器の口縁部は、高畑遺跡や大井宮の馬場遺跡（萩市）などに類例がもとめられる。また、住居外出土のすべての弥生土器についても時代幅が考えられないことから、集落の存続は比較的短期間であったことが想起される。

この住居は火災により終焉をむかえる。床全面に散乱した炭化木はその事実を示唆するもので、さらに住居の南半分は上流からの鉄砲水（日峰川の旧河道）の被害にあった痕跡が明瞭である。こうした自然災害が短期間に集落を廃絶させた要因となったのであろう。

後世、この地に集落が出現するのは室町時代後期である。掘立柱建物跡群の年代は柱穴内から出土した播鉢などを手掛りに推定可能で、大半がほぼ同時期とみなすことに矛盾はない。建物の平均規模は身舎2間×2間程度で、塀をもつ構造のものも検出されている。

以上、限られた調査期間のため発掘面積も狭く、各遺構の性格づけを行うに十分な資料は得られなかったが、従来、空白部分が多かった嘉万盆地北域における当該期の集落の存在とその構造の一端を明らかにすることができたことは大きな成果であったといえよう。

圖 版

図版 I



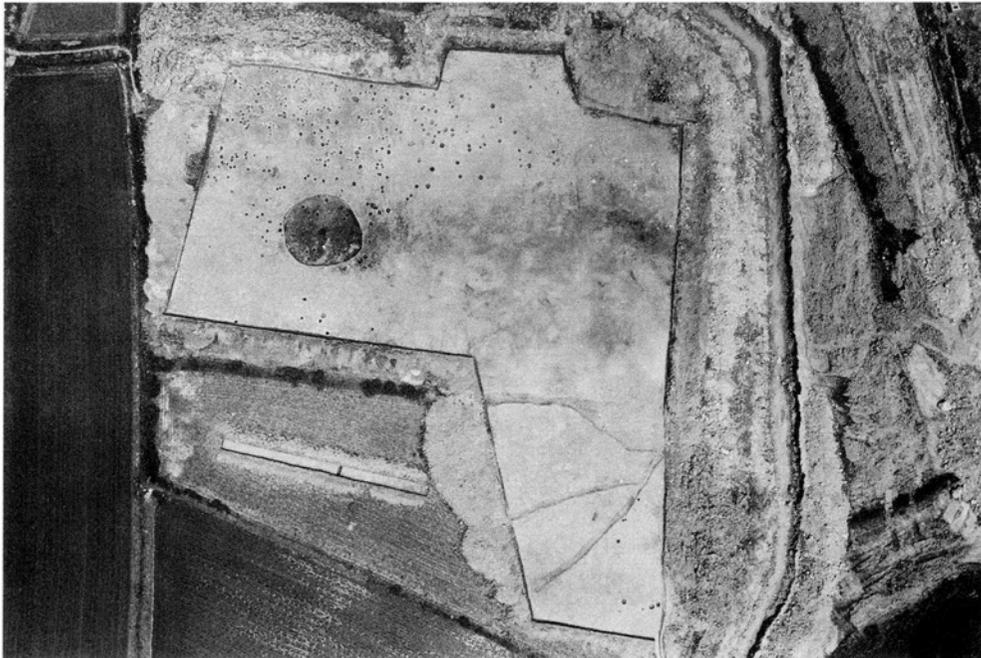
△遺跡の遠景（西から）



△調査地区の近景（南西から）



△調査地区の全景（南東から）



△調査地区の全景

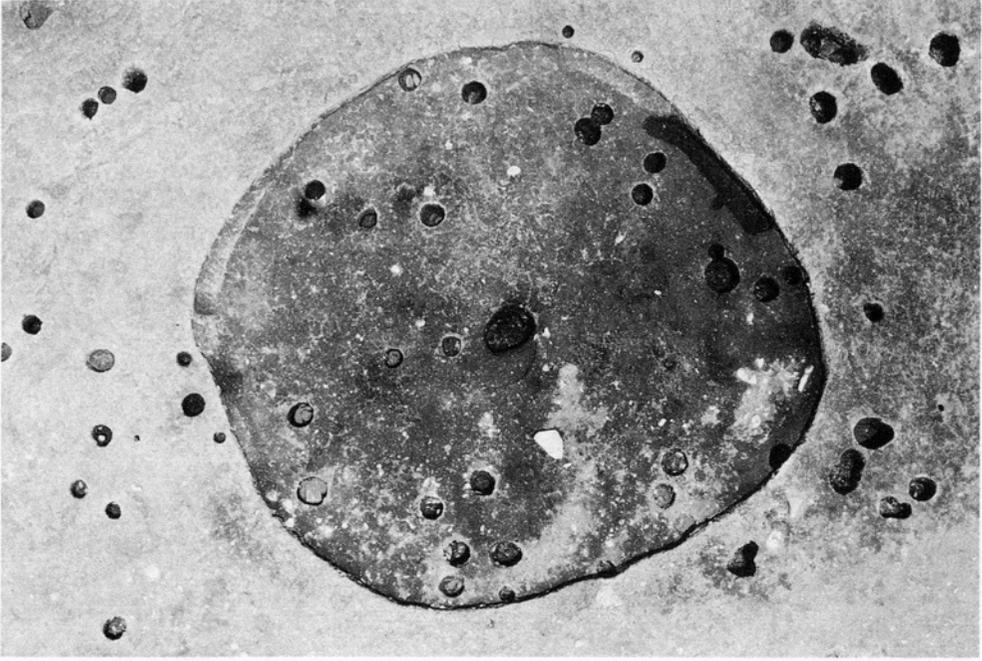
図版Ⅲ



△調査地区の完掘状況（北西から）



△調査地区の完掘状況（南東から）

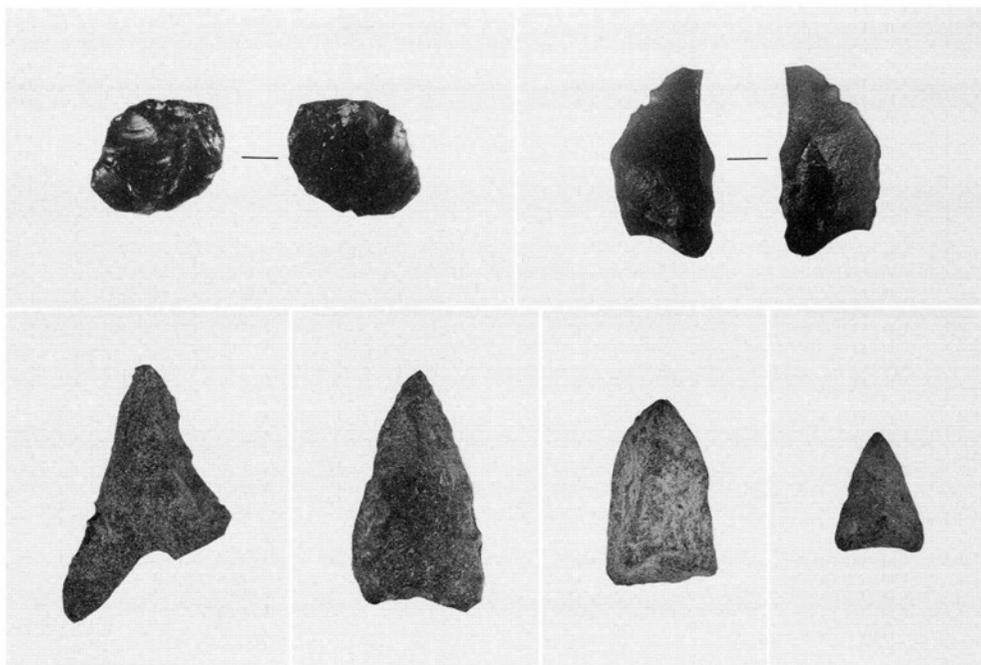


△豎穴住居跡 (DW-1)

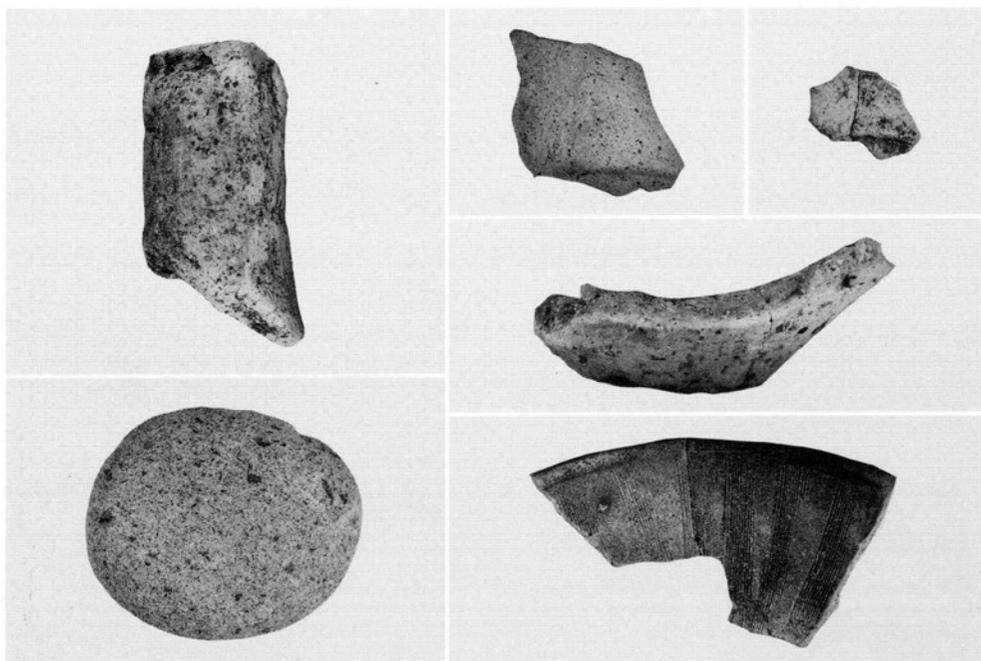


△豎穴住居跡 (DW-1)

図版 V



△出土遺物（旧石器・石鉄）



△出土遺物（弥生土器・叩石・播鉢）

山口県埋蔵文化財調査報告第110集

国 秀 遺 跡

昭和62年度県営圃場整備
事業に伴う発掘調査報告

昭和63年2月

編集 財団法人山口県教育財団
山口市大手町2130
山口県教育委員会文化課
山口市滝町1-1
山口県埋蔵文化センター
山口市春日町3-22
発行 財団法人山口県教育財団
山口市大手町2130
山口県教育委員会
山口市滝町1-1
印刷 瞬報社写真印刷株式会社
下関市大字清末1328
